

李卓吾本との差異に傍線を附す

第一百五十八回 ○漢中王 怒りて劉封を殺す

時に建安二十五年なり。延康元年に改む。夏六月なり。

却説、魏王の曹丕、王位に即きて自ら、文武・官僚を將ゐ、^{（一）} 尽く皆な升賞す。遂に甲兵三十万を統べ、南して沛国の譙県を巡る。先塋を大饗す。^{（二）} 郷中の父老、塵を揚げ道を遮り、觴を奉じて酒を進む。漢高祖 沛に還るの意に効ふ。

是の歳の七月の内、大將軍の夏侯惇 病ひ危ふきを聞く。丕 即ち鄴郡に還る。時に惇 已に卒す。丕 孝を掛け、東門の外に 殯を送り、厚礼を以て之を葬る。

八月の間、報称すらく、

「石邑県に鳳凰 来儀し、臨菑城に麒麟 出現し、黄龍 鄴郡に現はる」と。

丕の手下・百官 商議して曰く、

「今 上天 象を垂るは、乃ち魏 当に漢に代はるべきなればなり。受禪の礼を安排すべし。^{（三）} 漢帝をして將に天下を魏王に譲り与へんとせしめよ」と。

時に有り、侍中の劉廙、字は恭嗣、乃ち南陽の安衆の人なり。侍中の辛毗、字は佐治、乃ち潁州の陽翟の人なり。侍中の劉曄、字は子陽、乃ち淮南の城徳の人なり。尚書令の桓階、字は伯緒、乃ち長沙の臨湘の人なり。尚書令の陳矯、字は季弼、乃ち広陵の東陽の人なり。尚書令の陳羣、字は長文、乃ち潁州の許昌の人なり。

這の一斑の文武・官僚 四十余人、皆な来たりて、太尉の賈詡、相国の華歆、御史大夫の王朗に見え、共に此の事を言ふ。

賈詡 笑ひて曰く、

「公等の見る所、正しく吾が機と合ふ」と。

当日、華歆 文武・多官を引き、漢献帝に魏王の曹丕に禪位せんことを来奏す。つづく。

(一) 祖先の墓をおおいに祭って。

(二) 手配・段取りせよ。

(三) 李卓吾本で、華歆一人でなく、「賈詡・王朗、中郎將の李伏、太史丞の許芝と共に」が挿入される。嘉靖本では彼らの名は、次回の冒頭にあり、記載される場所が異なる。

(四) 李卓吾本で、「内殿に直入し」が挿入される。嘉靖本では、次回の冒頭にある。

第八十回 ○獻帝を廢して、曹丕漢を篡ふ

却説、賈詡、華歆、王朗、中郎將の李伏、太子丞の許芝と共に、文武・官僚を引ききて、内殿に直入し、獻帝に來見す。歆奏して曰く、

「伏して觀るに、魏王 宝位に登りて自り以來、徳を四方に布き、仁は万物に及ぶ。古を越へ今を超へ、唐虞と雖も以て此に過ぐることを無し。郡臣會議して言ふらく、漢祚已に終はり、伏して望むらく、陛下堯舜の道に効はんことを。山川・社稷を以て魏王に禪与せよ。上は天心に合ひ、下は民意に合ふ。則ち陛下安閑として憂ひ無し。祖宗の幸甚、生靈の幸甚、臣等議定して故に乃ち奏知す」と。

帝大いに驚き、半晌無言なり。百官を覷ひて哭して曰く、

「朕高祖三尺の劍を提げ、秦を平らげ楚を滅して、天下を創むるを想ふ。世統相ひ伝ふること四百年なり。朕不才なると雖も、又た過惡無し。安んぞ將に祖宗の大業等間して棄了せんとすることに忍びんや。汝百官、再び公に従ひて計議せよ」と。

華歆李伏・許芝を引ききて前に近づき、奏して曰く、

「陛下若し信ぜずんば、此の二人に問ふべし」と。

李伏奏して曰く、

「魏王即位して自り以來、麒麟は降生し、鳳凰は來儀し、黃龍は出現し、嘉禾・瑞草、甘露下降す。此に是れ上天象を垂れ、魏当に漢に代はるべきなり」と。

許芝又た奏して曰く、

「臣等、司天を職掌す。夜に乾象を觀るに、炎漢の氣數已に終はること見はる。陛下の帝星は隱匿して明るからず。魏国の乾象天を極め地を際り、之を言ふこと尽くし難し。兼上を更めて凶讖に応ず。其の讖に曰く、『鬼は辺に在り、委は相ひ連なる。当に漢に代はりて言うべきこと無し。言は東に在り、午は西にあり。兩つの日は並び光りて上下に移る』と。此を以て之を論ずるに、陛下早く禪位すべし。『鬼は辺に在り、委は相ひ連なる』とは乃ち『魏』の字なり。『言は東に在り、午は西にあり』とは乃ち『許』の字なり。『兩つの日は並び光りて上下に移る』とは乃ち『昌』の字なり。此に是れ魏許昌に在りて漢の禪りを応受するなり。願はくは陛下、是を察せよ」と。

帝曰く、

「祥瑞・凶讖、皆な虚謬の事なり。奈何虚誕の事を以て、万世・不朽の基業を捨てんや」と。

華歆又た曰く、

(一) 李卓吾本では、この登場人物が前回末に置かれる。

(二) 李卓吾本は、「宝」という修飾語をはずく。

(三) 李卓吾本は、「越」を「超」とする。

(四) 李卓吾本では、「問」を「聞」とする。

(五) 李卓吾本は、「誕」を「謬」とする。

「陛下 差たがふかな。昔日 三皇・五帝、徳を以て相ひ譲る。無徳は有徳に譲るなり。三皇より次後、各々子孫に伝ふ。桀・紂の無道に至り、天下 是を伐つ。春秋の強覇、各々相ひ吞併しんぺいして、福有るものは之に居り、後に秦に併せ入り、方に漢に帰するなり。『天下は一人の天下に非あらず。乃ち天下の人の天下なり』と。陛下の祖公 公おほやけに天下を伝へ継ぐ。宜しく早すみやかに之を退け。久しく疑ふべからず。遅れば則ち変を生ずるなり」と。

王朗 又た奏して曰く、

「古いにしへ自り以来、興るもの有れば必ず廢るるもの有り。盛んなるもの有れば必ず衰へるもの有り。豈に亡びずの道有らんや。安んぞ敗れずの家有らんや。陛下の漢朝 相ひ伝ふること四百余年なり。氣運已に極まれり。自ら迷ひを執りて、禍ひを惹くべからず」と。

帝 大いに哭す。後殿に入りて去る。百官 晒笑して退く。

次の日、官僚 又 大殿に集ひ、宦官をして獻帝を入請せしむ。帝 怯懼して敢えて出ず。曹皇后曰く、

「今 百官 陛下に朝を設け政を問はんことを請ふ。何ぞ相ひ推せんや」と。

帝 泣きて曰く、

「汝が兄 漢室を篡うばはんと欲す。故に百官をして、朕に相ひ逼らしむ。故に出いでず」と。

曹氏 大いに怒りて曰く、

「汝の言、吾が兄を篡国の賊と為す。汝の高祖、只だ是れ豊沛の一の酒を嗜む匹夫にして、無籍の小輩なり。尚ほ且四つ、秦朝の天下を却奪す。吾が父 海内を掃清し、吾が兄 累ねて大功有り。何ぞ帝と為るべからざること有らんや。汝 即位して三十余年なり。若し吾が父兄を得ざれば、汝 口粉と為らん」と。言ひ訖りて 便すなはち車に上ることを要し、外に出でしむ。帝 大いに驚き慌れ、更衣して前殿に出づ。

華歆 出班して奏して曰く、

「陛下 臣の言に依れば、大禍に遭まふを免かれん」と。

帝 痛哭して曰く、

「卿等、皆な漢の祿を食むこと久し。中間に漢朝の功臣の子孫多し。何ぞ一人も朕と与ともに憂ひを分かつもの無きや」と。

歆曰く、

「陛下の意、天下を以て魏に禪らず。且夕に蕭牆に禍ひ有りても、臣等 陛下に不忠ならざるなり」

帝曰く、

(一) 李卓吾本は、「次」を「以」とする。

(二) 李卓吾本は、「道」を「国」とする。論理が整合的となる。

(三) 李卓吾本は、「氏」を「皇后」とする。

(四) 李卓吾本は、ここに「強きに倚り」を挿入する。

(五) 李卓吾本は、「却」を強」とする。

(六) 李卓吾本は、「外に」を、「殿を」とする。情報量が増えている。

「誰か敢へて朕を弑するや」と。
歆曰く、

「天下の人、皆な知る、陛下に人君の福無く、以て四海に大乱を致すことを。若し魏王朝に在らずんば、陛下を弑する者は、公庭に塞ぎ満つ。陛下 尚ほ恩は其の徳に報ずるを以てすることを知らざれば、直ちに天下の人に令し、共に陛下を伐たんと欲するなり」と。

帝曰く、

「昔日 桀・紂 無道にして生靈に残暴なり。故に天下の人之を伐つことに惹かる。朕即位してより以來、三十余年なり。兢兢・業業として、未だ嘗て敢へて半点・非礼の事を行はず。天下の人、誰か之を伐つに忍びん」と。

歆 大怒して声を励まして言ひて曰く、

「陛下 無徳・無福なれども大位に居ること、残暴の君よりも甚だしきなり」と。

帝 大いに驚き袖を払ひて起つ。王朗 目するを以て華歆を視る。歆 縦歩して前に向ひ、龍袍を扯住し、色を変じて言ひて曰く、

「許すと許さざると、従ふと従はざると。早やかに一言を發せ」と。

帝 戦慄して答ふる能はず。

忽ち曹洪・曹休の二人、劍を帯びて上殿し、声を励まして問ひて曰く、

「符宝郎 安ここにか在る」と。

班部の中より、一人出でて曰く、

「符宝郎、此に在り」と。

洪 劍を抜きて玉璽を索し要む。

符宝郎の祖弼 之を叱りて曰く、

「玉璽は乃ち天子の宝なり。安んぞ擅いままに汝に与えんや」と。

洪 喝して武士 促して出で、之を斬る。祖弼 大いに罵り、絶えずして死す。

帝の体 戦へて已まず、只だ階下を見る。甲を被て戈を持すもの数百余人、皆な是れ魏の兵なり。帝乃ち流涕・出血して嘆じて曰く、

「祖宗の天下、何ぞ今日に之を廢するを期せん。朕 九泉の下に死して、何の面目にて先帝に見ゆること有らんや」と。

泣きて郡臣に告げて曰く、

(一) 李卓吾本は、「忽ち」を「忽然」とする。

(二) 李卓吾本では、「口を絶えず、而して死して静かなり」と、符宝郎の悲劇性が強調されている。

(三) 李卓吾本は「体」を書かず、ただ「戦慄す」とする。李卓吾本は、近い箇所類似した意味の表現があった場合、重複して同じ文字を使うことを厭わない。嘉靖本は、異なる文字を使うように、配慮されている。嘉靖本は文学的（表現が多彩）、李卓吾本は論理的（同定が容易）な印象である。

「朕願はくは將に天下を魏王に禪らんとす。幸ひ残喘を留め、以て天の年を終へん」と。
賈詡曰く、

「臣等、安んぞ敢えて陛下に負くもの有らんや。陛下 急ぎ詔を降し、以て衆心を安んずべし」と。
帝の哭する声 絶えず。乃ち桓階・陳羣をして、禪国の詔を草せしむ。華歆をして詔璽を口捧し、百官を引きて直ちに魏王の宮に至りて献納せしむ。是に於いて曹丕 欣然として喜び、開きて詔を読みて曰く、
「朕位に在ること三十二年。天下の蕩覆に遭ふて、幸ひに祖宗の靈に頼り、危くも復た存す。然れども今 天象を仰瞻み、民の心を俯察するに、炎精の數 既に終はりて、行運 曹氏に在り。是を以て前王既に神武の蹟を樹て、今王 久しく明德を光耀して、以て其の期に應ず。曆數は昭明にして、信に知る可し。夫れ大道の行はるるや、天下 公を為し、賢を選び能に与す。故に唐堯は厥の子に私せず、而して名無窮に播す。朕 義なりとして焉を慕ふ。今 其れ踵を堯典に追ひ、位を禪りて丞相・魏王に与ふ。王 辞することを得ること無かれ」

曹丕 聴き畢り、便ち此を受けんと欲す。司馬懿 諫めて曰く、
「王よ、上は軽んずべからず。詔璽 已に至ると雖然も、謙辞を上表して、以て天下の人の謗りを絶つべきなり」と。

丕遂に之に従ひ、急ぎ王朗をして表を作らしめ、印綬を口回し、虚辞もて謙讓す。王朗等 入内して帝に奏す。其の表に曰く、

「臣丕 頓首して詔を受け奉る。伏して惟るに、陛下 垂世の詔を以て、無功の臣に禪る。臣をして聞か初めて肝胆 摧け裂け、措く所を知らざらしむ。切に以んみるに、堯 大位を賢に譲りて、巢由 跡を避け、後世之を称す。臣 才は鮮なく徳は薄し。安んぞ敢へて命を奉ぜん。請ふ、盛世に於いて別に大賢を求め、礼を以て之に譲り、庶はくは萬年の議論を免れよ。臣 謹んで璽綬を納めて還し、死を闕下に待つ。惶懼・戦慄の至に勝へず、表を奉る」と。

献帝 覽じ畢り、甚だ是れ驚き疑ひ、郡臣を回顧して曰く、

「魏王の謙遜 之のいかんせん」と。

華歆 奏して曰く、

「陛下 唐堯に学ばんと欲するや」と。

(一) 寿命はまだ残っており、天寿を全うしたい。

(二) 李卓吾本は、「頓首して」を「謹んで」とする。

(三) 李卓吾本は「譲り」を「識り」とする。

(四) 李卓吾本は、「臣」を「臣丕」とする。

(五) 李卓吾本は、「学ばん」を「効(なら)はん」とする。

(六) 毛宗崗本では、華歆が「曹操を魏王に封ずるときも三讓があつた。だから再び詔すれば受けるだろう」というセリフが補われる。嘉靖本にも李卓吾本にもない。公主の降嫁が唐突に思われ、毛宗崗本が補つたのであろう。

帝曰く、

「何をか謂ふなり」と。

歆曰く、

「昔唐堯二女有り。長曰く娥皇、次曰く女英と。舜に禪位を為すも、舜堅く辞して受けず。遂に二女を以て之に妻はす。後世大聖の徳と為して称す。今陛下も亦た二公主有り。何ぞ唐堯に効ひて以て魏王に妻はさざるや」と。

帝已むを得ず、遂に復た桓階をして詔を草せしむ。高廟使の張音をして、持節して璽を奉ぜしめ、併せて二公主を載せ、魏の王宮に径入す。曹丕開きて詔を読みて曰く、

「咨爾魏王、上書・謙讓、朕切に為ふに、漢道陵遲し、日已に久しきことと為る。幸ひに武王たる操の徳符運に膺り、神武を奮揚し、兇暴を芟夷して、区夏を清定す。今王たるは前緒を継ぎ承け、至徳は光昭なり。声教は四海に被び、仁風は鬼区を扇ぐ。天の歴数實に爾の躬に在り。昔し虞舜大功二十有りて、而して放勳禪るに天下を以てす。大禹疏導の績有りて、而して重華禪るに帝位を以てす。漢堯の運を承け、伝聖の義有り。加々靈祇に順ひて、天の明命を紹ぐ。二女を釐めて降し、以て魏に嬪せしむ。行御史大夫の張音をして、節を持して皇帝の璽綬を奉ぜしむ。永く人君と為す。万国天威を敬し、允に其の中を執れ。天禄永く終へん。之を敬しめ。時に延康元年十月乙卯に詔す」と。

曹丕欣喜す。暗かに賈詡と与に曰く、

「二次に詔有りと雖も、孤但だ天下に篡逆の名を除く能はざるを恐るなり」と。

詡曰く、

「此の事、極めて易し。再び張音に命じて璽綬を口回すべし。却りて華歆に教へて漢帝をして一台を築かしめよ。受禪台と名づけ、吉日・良辰を択び、大小の公卿・四夷・八方の人を集めよ。尽く台の下に至らしめ、天子をして親から璽綬を奉じ、天下を禪り王に与へしめよ。以て智者の口を絶つべし」と。

丕大いに喜び、即ち張音をして璽綬を捧回せしむ。仍りて表を作りて謙讓す。音回りて献帝に奏す。

帝郡臣に問ひて曰く、

「魏王意無し。卿等若何せん」と。

華歆奏して曰く、

「陛下一台を築き、名づけて受禪台と曰ふべし。公卿・庶民を集めて明白に禪位すれば、則ち陛下子々孫々に必ずや魏の恩を蒙らん」と。

漢帝之に従ふ。乃ち太常院官をして地を繁陽に卜し、繁陽に三層の高台を築起せしむ。十月庚午日の寅刻を択ぶ。時に当たり、献帝議曹の曹丕に台に登壇するを請ふ。受禪台の下、大小の官僚四百余員、御林・虎賁の禁軍三十余万並びに匈奴の单于、化外の人が集ふ。帝親から玉璽を捧げて曹丕に奉る。丕之を受く。台下の郡臣跪きて冊を讀むを聴きて曰く、

(一) 李卓吾本は、ここに「張音詔を辞して至る」とある。

(二) 「教」には使役の用法があるが、使役が重複するので、使役による訓読を避けた。

「咨爾魏王よ。昔者帝堯虞舜に位を禪り、舜も亦た以て禹を命ゐる。天命常に於いてせず、惟だ有徳に帰す。漢道陵遲して、世々其の序を失ふ。朕が躬に降り及び、大乱茲昏、羣凶肆まに逆らひ、宇内顛覆す。武王の神武に頼りて、茲の難を四方に拯ひ、惟区夏を清め、以て我が宗廟を保綏す。豈に予一人又むるを獲んや、九服をして実に其の賜を受けしむ。今王欽みて前緒を承け、乃が徳を光す。文武の大業を恢め。爾度れ、虞舜に克く協ひ、用て我が唐典に率ひ、敬みて爾が位を遜れ」と。於戲、天の歴數爾の躬に在り。允に其の中を執り、天の祿永く終らん。君其れ祇みて大礼を順ひ、萬國を饗け、以て肅みでに天の命を承けよ」と。

冊を読むこと 已に終わる。魏王の曹丕即ち八般の大礼を受け、帝位に登り了る。賈詡大小の官僚を引きて、台下に朝す。

延康元年を改めて、黄初元年とす。国号は大魏とす。曹丕聖旨を伝えて普ねく天下の罪犯を赦す。父の曹操に諡して太祖武德皇帝とす。華歆奏して曰く、

「天に二日無く、民に二王無し。既已に天下を交割す。劉氏をして何れかの地に安置すべきか」と。言ひ訖るや、献帝を扶けて、台下に跪き、旨を聴かしむ。

賈詡奏して曰く、

「封を以て公卿と為せ。即日便ち行へ」と。

丕遂に帝を封じて山陽公と為す。

華歆劍を按じて帝を指し、声を励まして言ひて曰く、

「一帝を立て、一帝を廢するは、古の常礼なり。今上の仁慈害を加ふるに忍びず。汝を封じて山陽公と為す。今日便ち行け。宣召非ずんば、入朝することを許さず」と。

献帝涙を含みて拝謝し、馬に上りて去る。

台下の軍民・夷狄、大小の人等、之を見て傷感して已まず。丕郡臣に与へて曰く、

「堯舜の事、朕之を知るかな」と。

郡臣皆な万歳三声を呼ぶ。後人此の受禪台を觀て詩有りて嘆じて曰く、

「鳶鴟・鸞鼠・腥さく、狐臊さし。鬼は野を吹き、火は蓬蒿を焼く。此の台禪と名づけども、人禪らず。斯の地 高き道と雖も、高からず。黄土の一堆、真に恥づべし。虚はり巍巍として在り、空裏を半にす。唐虞の揖讓の風を壊却し、乱臣・賊子此れより起こるなり」と。

又た詩に曰く、

「兩漢經營すること四百年。小平津の畔、独り潜然とす。黄初唐虞の意を解せず、土を築きて台を成し、晋宣に教ふ」と。

(一) 『献帝伝』に記された、漢魏革命を正当化する論理に対して、皮肉を言ったもの。「道(塗)に当たりて高いのは魏である」と。だが『三国演義』には、当塗高の解釈がない。この詩の皮肉を理解するためには、『献帝伝』も読まねばならない。物語の構成として不親切である。

(二) 晋の宣帝とは、司馬懿のこと。

又た宋賢詩有りて曰く、

「墨土曾て受禪台を営し、漢帝を欺き凌ぐこと、嬰孩の若し。誰ぞ天意を知り、私曲無からん。久しくせず依然として、主に換はるもの来る」と。

又た曹丕を諷刺して詩に曰く、

「曹丕 覇を強ひて乾坤を奪ふ。悪を積み殃ひに遭ふこと、子孫に及ぶ。受禪の高台、猶ほ自ら湿らすがごとし。誰ぞ知る、司馬 又た尊を称するを」と。

又た詩に曰く、

「当年 曹氏 劉を強吞す。自ら兒孫と謂ひ、万秋を樂しむ。受禪層台 司馬の上るは、山陽 還りて、陳留に似ることを得る」と。

漢獻帝 山陽を望みて去る。百官 曹丕に請ひ、曹丕 天地に答謝す。丕 方に下拜せんとするに、忽然と台前に一陣の怪風 起こり、砂を飛ばし石を走らす。急なること驟雨の如し。面に対ひて見えず。台上の火燭、尽く皆な吹き滅さる。丕 驚きて台上に倒る。百官 急ぎ来たりて、之を救ふ。未だ性命の如何を知らず。

却説、衆の文武 曹丕を救ふを得て、台を下る。半晌、方に醒む。自身 宮中に扶け入る。数日、朝を設く能はず。後に病 稍々可し。將た華歆を司徒に封じ、王朗を司空に封じ、大小の官僚、一一賞に陞る。其の驚疾 未だ痊たるに、車駕を却排し、許都より洛陽に幸す。大いに官室を建つ。

(一) 挿入される詩は、曹丕の受禪を不当と見なし、後に曹氏が司馬氏に対して禪讓させられ、その報いを受けたとするものばかりである。